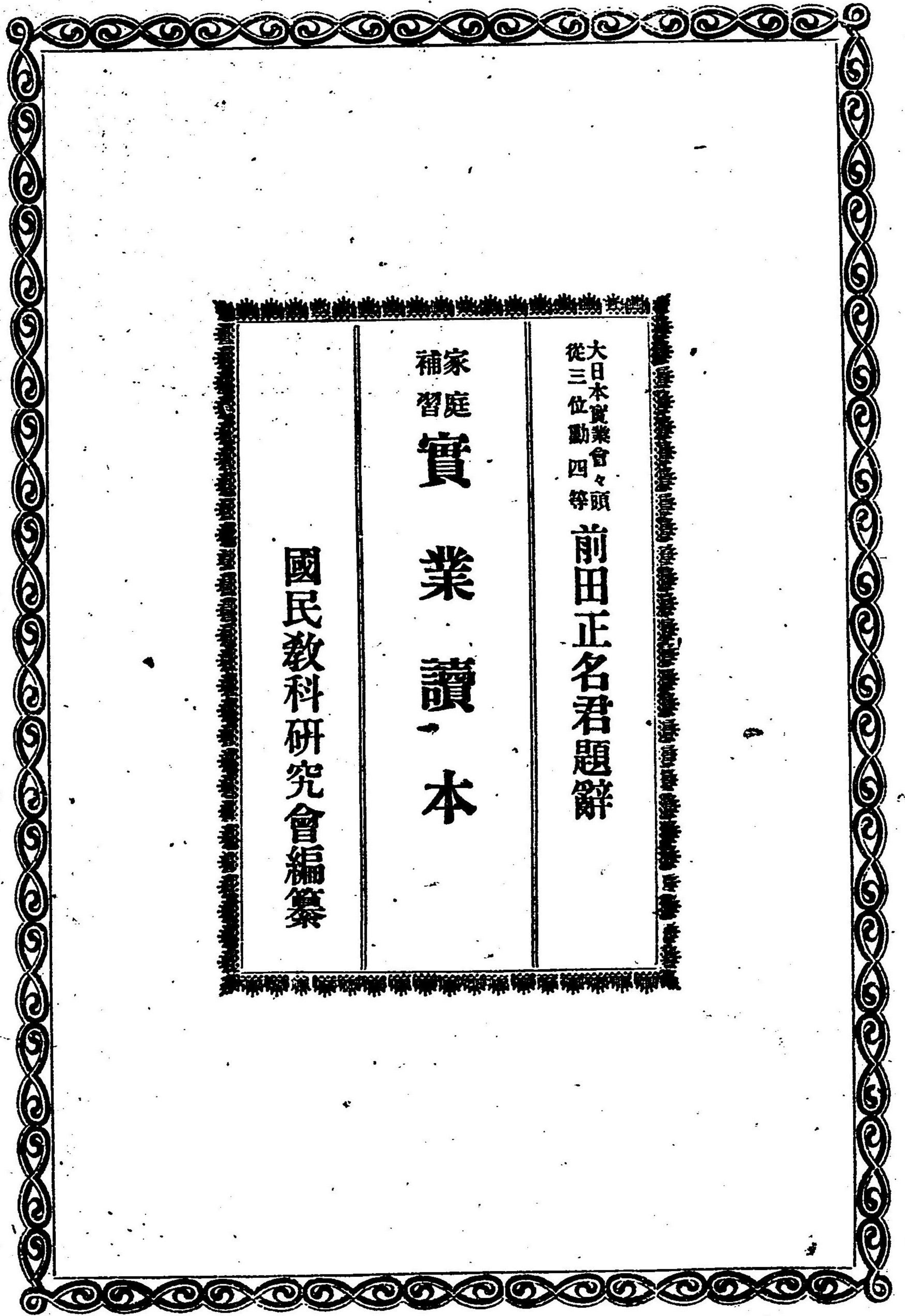


特23

174



米倉
五



大日本實業會之頭
從三位勳四等 前田正名君題辭

家庭實業讀本

國民教科研究會編纂



第九課第十課參考照

緒言

一本書は、實業教育の一助として、義務教育を卒へたる者に、我國の位置地勢氣候物産の如何、農工商及び水産業の發達模範とすべき實業家の傳記、并に世界に於ける我國の位置を知らしめ、兼て實業を重んじ、自營獨立の思想を養成せんが爲めに、編纂せしものなり。

一本書は總て四卷となし、每卷之を二十課に分つ、其行文は平易にして、解しやすきを旨とし、其材料は務めて兒童經驗の範圍を脱せざらんことを期せり。

一卷首に於ける挿畫は、讀者をして不知不識の間に、實業上の興味を喚起せしめ、以て自ら奮勵するところあらしめんがためなり。

明治三十五年九月

編者識

家庭補習 實業讀本卷一

目次

- 第一課 美しき我國
- 第二課 衣食住
- 第三課 人の務
- 第四課 一生の計
- 第五課 蟻といなごとの話
- 第六課 養蠶
- 第七課 生絲蠶卵紙
- 第八課 伊藤小左衛門
- 第九課 陶器と漆器

- 第十課 陶祖春慶
- 第十一課 身は世をわたる舟
- 第十二課 海の話
- 第十三課 野中兼山
- 第十四課 森林の効用
- 第十五課 山元莊兵衛
- 第十六課 石炭
- 第十七課 汽車汽船
- 第十八課 郵便電信
- 第十九課 誠の學問
- 第二十課 職業に貴賤なし

第一課 美しき我國

我等が住める大日本帝國は、あしあ洲の東部にある獨立帝國にして、五つの大島と數多の小島とより成る。地形は細長くして、東北より西南にのび、北はおこつく海をへだて、しへりやに向ひ、西北は日本海及び支那海をへだて、朝鮮、支那及びしへりやとなり、東南一帯は太平洋に面して、遙にありかに對し、西南は海を隔て、ふいりっぴん群島と相望む。全國の面積は凡そ二萬七千三百方里、人口は四千五百萬人に餘れり。世界中に國といふ國は多けれども、我國の如く美しきはなし、氣候は溫和にして、地味肥え、田野遠く連りて、穀菜豊

かに實り、森林よりは良材を出し、山地よりは鑛物を産す、四圍をめぐれる海は航海の便自在にして、こゝに産する魚介海草は其數を知らず。國民は概ね、伶俐にして進取の氣力に富み、且美術工藝の手工に至りては、一種特得の長所あり、殊にすぐれたるは國俗の美しきなり、上には萬世一系の君主ましく、徳をしき、教をひるめたまひ、下には忠直の民ありて、皇室を敬ひ、國を愛するの心深く、上下相和ぎて一國の内恰も一家の如しかくの如く美しき帝國に生れたる我等は、相親み相助けて、各其業を勵み、我國土無盡の富源を發達せしめ、以て皇恩の萬一に報い奉らんことを期すべし。

第二課 衣食住

人の此世にあるや、日常缺くべからざるものは衣、食、住の三なり。

衣服には種々あり、木綿にて作れるもあり、或は麻布を用ひ、絹布を用ふるもあり、又毛織物等にて製したるもあり、其用は寒暑を防ぎ、體温を程よくするにあれども、又禮をととのへ、身をかざるためにも用ふるなり。

食物となるべきものは、米、麥、其他の穀類、野菜、肉類種々ありて、皆身體を養ふに用ふ、故に人生の爲め、殊に缺くべからざるものにして、衣、食、住の三つの者の中、最も必要なるは食物なり。

住こは、家屋のことにして、木にて造れるもあり、石にて造れるもあり、其他種々あれども、其用は、雨露をしのぎ、寒暑をさけて、安樂に寢食するを得るにあり、此三つのものは、人間の生活に必要なものにして、我等の日常働くも、畢竟此三つの者を得んが爲なり。

第三課 人の務

人の務には、種々あれども、農工商漁業等の如く、直接に衣食住に必要な品を作り出すを實業といひ、之に従事する人々を實業家といふ。古は實業家を賤しみて、官吏學者のみを貴びたる風ありしが、今日に至りては、商人にても學問に達したるものあり、農工にても、智識す

ぐれたるものあり、されば官吏なりとて、あながちに商人より貴しとする能はず、農工なりとて、あながち學者より賤しとする能はず。

人の貴賤は、職業に在らずして、全く人品に在り、たとひ甚だひくき職業を爲すとも、智を研き徳を修むる時は、人品愈々進みて、自ら世の尊敬を受くべし、之に反して如何なる高き官職にある人たりとも、品行修まらざるときは、世の譏を受け、永く其職を保つこと能はず。されば人は、徒らに職業の高下を論ぜず、務めて人品を進むることを心がくべし。

世の中の業務は、種々ありといへども、相離るべからざ

る關係ありて、互に相助けて人の幸福を増し、世の進歩を資くるものなり、官吏學者などは、直接に衣食住の本を作るものに非ざれば、自然の限りありて、多數の人皆従事せんとするとも、之を容るゝ餘地なし。然るに農工商等は、直ちに衣食住の本を作りて、片時も缺くべからざるものなれば、多數の人、これ等の業に従事すとも、決して多きをうれへず。故に人は、其の職業を擇ぶに當り先づ第一に此等の事に注意し、之を擇びたる以上は、各其業務の貴重にして、且名譽あることを思ひて、自ら重じ、一心に勉勵せざるべからず。萬民皆斯くするときは、各自の幸福を得るに至るべく、萬民が幸福を得ること

次第に多くなるときは、其國の幸福も増すに至るべし。蓋國は萬民の集合せるものなれば、國の幸福は萬民の幸福にして、萬民の幸福は即ち國の幸福なり、故に人たる者は各其業務を勵みて、國の幸福を謀らざるべからず、是れ人たる者の本分なり。

第四課 一生の計

古語に、一生の計はつとめにありといへり、勤めざれば、萬の事行はれず、身を立つることかたし。又一生のつとめは若き時にあり、人の身を立つる計は、三十歳の内に覺悟すれば、一生の家業成り立つ、其内覺悟なく怠れば、一生立ちがたし。一年の計は、春にあり、春の間おこたり

ぬれば、一年の事なり難し。一月の計は上旬にあり、朔日
より十日までの内につとむれば、一月の事成りやすし。
十日の間に、末二旬の日數をたのみておこなれば、其事
成就し難し。一日の計は、朝にあり、朝に一日の間の事を
よく考へ定め、早く勸むればはかゆく、若し朝の間おこ
たれば、一日のつとめはかゆかず、又明日の計は、今夕に
あるべし、明日の事を明日はからんとて、今日定めざれ
ば、つまづきてはかゆかず。(大和俗訓)

第五課 蟻といなきことの話

秋も過ぎ去りてはや冬の初となり、蟻の仲間は忙しく
雨露にさらせる穀物を、己が住家に積み入れて、寒さの

用意をなせり。折しも秋の終に生き残りし一匹のいな
ご、飢寒にたへかれ、半死半生の姿にて蟻の家に来り。う
やくしく腰をかゝめて、君が家に貯へたる小麥にて
も大麥にても、唯一粒を恵みて、この難澁を救ひ給へと
願ひしに、一匹の蟻これをなじりて、我等は夏の間、辛
苦して食物を貯へしに、君は更に其用意もせず、長き夏
の間は何事をなして日を送りしやと尋ねしに、いなご
は赤面してされば、其事なり、夏の間は唯面白く月日を
送り、朝には露を飲み、夕には月に歌ひ、花に戯れ、草に舞
ひ、冬の來らんとはゆめく考へざりしなりと答へけ
れば、蟻の云ふよ、君の言葉を聞きては、我等は最早別

に云ふべきことはなし、誰にても夏の間に遊び情りしものは、冬に至りて餓死すべきは當然なりとて、いなごの願ひをことわりしとぞ。(童蒙教草)

第六課 養蠶

我國より輸出する貿易品の第一なるは、生絲なり、その生絲は、近頃處々に産すれども、上野、下野、信濃、岩代のもの殊に世に名あり、生絲は蠶より得たる絲なり、故に先づ養蠶の事をかたるべし。

春の末、桑の芽の出づる頃を見計らひ、かねてかこひおきたる種紙をかへすべし、此くて孵りたる蠶を掃き立て、桑の葉を與へて、これを飼ふ。蠶は日々に生長して、一

眠二眠三眠を経て、老蠶となり、繭を作る。老蠶とは十分に生長したる蠶をいふなり、蠶の初より、繭となるに至るまで、其日數凡そ三十七八日なり。

眠とは、蠶が皮をぬぎかふる時にして、此間桑を食はず、身を動かさず、恰も眠れるが如し、其皮をぬぎ終りて、再び桑を食ふ時を起といふ、又初眠を獅子の休、二眠を鷹の休、三眠を船の休、四眠を庭の休ともいふ。

蠶は、繭の中に、其身を隠して、蛹となり、再び蛾となる。蛾になれば、自ら繭を食ひ破りて、外に出づ、故に蠶の繭を作るは、此變化をなさんがための、仕事なりと知るべし。

第七課 生絲 蠶卵紙

繭を破りて出てたる蛾を厚き紙の上にはなち置きて、卵を産ましむ、かくして生ませたる紙を種紙といふ。此種紙をかこひ置き、翌年に至りて又かへし養ふなり。然れども生絲を取らんには、蛹の蛾にかへらぬよゝに或は日に干し、或は蒸し殺し、それより鍋にて煮、絲に繰るなり。

繭より絲を引き出すに、其繭の性質と、繰るべき品とによりて、太さ細さ異なれども、多くは繭四つを、一筋に取るものなり。これを繰り取りて、巻きつくる籠をあげ、籠といふ。又其繰方に、座繰と機械とあり、座繰は人の手にて繰るを云ひ、機械は蒸氣若くは水車機械にて繰るを

いふ、貿易には機械の方價貴し、是其絲にムラなくして、ヨリのかゝりも一樣なるが故なり。

種紙も亦外國輸出品の主なるものにして、養蠶の當り外れ、生絲の出來、不出來は、大かた種の善惡によるといへば、よく其種を選らぶべし。

抑々養蠶の道は、かしこくも 天照大神のしたしく教へ給ひしわざにして、我國神代より傳はれるなり。今日我國産物の第一と稱するも、誠に 大神の賜なり。我國の民たるもの争でか其恩徳を仰がざるべき。

第八課 伊藤小左衛門

伊藤小左衛門は、伊勢國三重郡室山村の人にて、世々農

業を營み、又味噌、醬油を醸造せり。一日書を讀み、外國に於て、茶及生絲の需用殊に多きを知り、始めて志を蠶茶の業に傾け、先づ山地を開墾して茶を植え、培養の道に心を盡しけり、會々横濱港開けて、輸出の道開ければ、文久元年他の茶商と相謀り、共同して、製茶十萬餘斤を海外に出して二千六百餘圓の利を得たるを以て、益々茶樹を増殖して、専心此業に従事せり。又一方には蠶業を起さんと欲し、先づ桑樹數千株を植え、文久二年初めて工女二人を雇ひ手繰法に従ひて、試みに生絲を製せしめ、其後年々擴張して、明治七年八十餘坪の製絲場を建て、十人繰の器械を据え付け、次きて又四十餘坪の貯

繭庫と、外に同坪の蒸氣器械場を造り、又別に三層の養蠶室を構へたり、然るに其製造せる生絲の品質佳良ならざるがため、千餘圓の損失をなせり。然れども毫も撓まず、自ら上野國富岡製絲場に至りて、其傳習を受け、翌八年器械を増置して三百餘斤の絲を製し、再び横濱に送りしに、又千餘圓の損失をなせり。小左衛門猶屈せず、妻子を富岡に遣はし修業せしめ、同十年大に器械を改良し、工女六十餘人を雇ひ、其製絲一千餘斤の多きを得て、横濱に出せしに、果して外商の意にかなひ、聲價殆んど富岡製の如く、其後年々製出する所平均千餘斤に上り、利を得ること亦隨ひて多かりしが、明治十二年五

月死せり。明治十三年 今上天皇御巡幸に際し、小左衛門の業に勉めしを追賞し給ひ明治十六年農商務卿より又其功を追賞されたり。小左衛門が所有の製絲場より外國の大博覽會へ出品して賞牌を受けしこと屢ありと云ふ。

第九課 陶器と漆器

燒物に磁器と陶器との二種あり、磁器は石焼にて、尾張の瀬戸、肥前の伊萬里等より出づる茶碗、土瓶、皿鉢の類をいふ。陶器は土焼にて、今戸焼の火鉢、屋根瓦の類をいふ。西京の清水焼は藍繪の美しきに名あり、加賀の九谷焼は赤繪の麗はしさ類なし、薩摩の陶器は、模様細く伊

勢の萬古は其製風雅なり。其原料は何れも陶土にてこれをこれ各適宜の形に造り窯に入れて焼くなり、光澤を出だす薬を釉薬と云ふ。

漆器とは、膳、椀、重箱等すべて漆にて塗りたる物の總稱なり。其漆は漆の樹液を取りて製せしものにて、塗り方には蠟色、艶消、春慶等種々あり、又其色は黒色を本とすれども、朱藍等を交ふる時は、赤青などの諸種の色を出だすなり。漆器の最も貴きものを蒔繪といふ。蒔繪には金銀を塗り上げたる美麗のものあり。

陶器は世界各國之を製するも、其種類の異なるが爲め、又其國內の需用を充たす能はざるがために之を輸入

する國多し。我國の如きは、陶器を一の重要輸出品となし、之を歐米に輸出す、合衆國及び英吉利等に送るものは、裝飾用の花瓶、皿の類多く、日用品には珈琲茶碗、肉皿等の類あり。又印度、支那、朝鮮に輸出するものは、飯碗、湯呑茶碗等の日用品多し。

漆器は我國特有の製品にして、現に外人は漆器をさして、直ちに「日本」と稱するなり。然れども其輸出額は一ケ年凡そ百萬圓に過ぎず、是蓋製品の、小卓子、盆、飾臺、小箱等の裝飾品なるを以て、其販路廣からざるがためなり、其重なる輸出先は英吉利にして、獨逸、印度、佛蘭西、亞米利加等へも多少輸出するなり。

第十課 陶祖春慶

加藤四郎左衛門景正は、大和國諸輪庄、道蔭村に生れ、春慶と號す。幼より孝心深く、土器を作るを好み、自ら一種の妙ありき。されども己は其工の支那製に及ばざるを歎き、常に往きて學ばんと思ひ居りしも、未だ其志を得ず。久我家に仕へて時を待ちけるに、貞應の頃僧道元の支那に行くを聞き、仕を棄て、これに隨ひ、彼國に赴きて、留り學ぶこと拾六年、悉く其術の奥義を得て歸朝せり。

それより諸國を巡りて、陶器の製造にかなふべき土を求めたれども得ず、偶々尾張國東春日井郡瀬戸村に到

りけるに、かねて望める土ありければ、大に喜びやがて其地に窯を開きて、製造をはじめたり。是より瀬戸焼の名漸く揚り、今日に至りては、焼物を指して瀬戸物といふに至れり。されば瀬戸の村人は、其徳を高しとし、慶應二年其地に碑を立て「陶祖春慶翁之碑」とぞ記しける。

第十一課 身は世をわたる舟

世は海なり、身は舟なり、志は舵なり、舵をあしくとれば、行くべき方に行かず、風波にあへば、舟くつがへるが如し、志のもちよー肝要なり。あしく志を持てば、身をくつがへず、舵のとりよーあしくして、舟をくつがへすが如し。
（天和俗訓）

第十二課 海の話

晴れたる日、海岸に出て沖の方を望めば、水も天も唯一色にて、恰も一面の大鏡を浮べたるが如きを見るならん。されど其底をうかがへば、山あり谷あり森あり林あり、又動物の住所もありて、其さま恰も陸地と異ならず。此海中なる山の海面に出でたる所は、島にして、谷の最も深き處は、大洋なり。陸地の山谷には、松杉などの長大なる森林あれども、海中の山谷には、昆布、わかめ、ひじきなどの海草生ひ茂りて、其大なるは、二三丈にも及ぶものあり。又海底の岩石には、大小の洞穴幾千萬の數を知らず、相

ならびて、其中には、鯛、ひらめ、こちす、まきの如き魚もあり、牡蠣、あじの如き貝もあり、蝦蟹の如き蟲もあり、これらのもの群がりすみ、相往來して食を求む、其さま亦陸地の動物に異ならず。人は、網をおろし、釣をたれて、此等の魚貝を捕ふ、之を漁業といふ。我國は四方海なるが故に、水産物の種類多く、之より得る利益も甚だ大なり。

第十三課 野中兼山

野中兼山は、通稱を傳右衛門と云ふ、土佐の人なり、嘗て江戸に來り、歸國する前に、書を郷里の知人に送りて、土佐は物としてあらざることなけれども、惟蛤蜊のみ生

ぜざれば、此の度の歸國に際し、江戸土産に、蛤蜊を一艘の船に積み載せて歸るべし、若し海路幸につゝがなければ、之を進呈せんと言ひ越したれば、いづれも珍らしき土産なり、早く賞味せんものと、指折り數へて、安着を待ち居たり。然るに兼山無事に、着しけるが、其蛤蜊を一個も残さず、城下の海に投げ入れしめたり、衆大に怪みて、今度の歸國には、此の地に産せざる珍らしき土産を賜はらんとの事なりしかば、我等は日を數へて待ち居りしに、其の土産物は皆海中に捨てられしは、如何の所爲なるぞ、我等を欺きしやと問ひければ、兼山笑ひてこれ即ち君等に進呈したるなり、されども君等の口に

直に入れざるは、永く君等の子孫に飽かしめんが爲なりと言ひければ、一同之をいぶかり居たりしが、其後數年ならずして、果して多くの蛤蜊を産し、遂に土佐の名産となりしをもて、一同其遠謀に感心したりしとぞ。

第十四課 森林の効用

我國では、家をたてるに、多く樹木を用ひます、又日用の器具も、木造のもの多く、又煖を取り、物を煮るにも、皆薪炭の力にふるのであります、かよゝに我等の日々生活するには樹木を要することが多いのであります。又一方よりいへば、森林の樹木は、景色を調へて我等の目をよるこばすことが多くあります。即ち櫻は春の世

界をよそほひ、紅葉は秋の野山をかざり、又松杉の澤山生え茂った處は、何となく心がしんとして清らかになるものであります、かよゝに森林は我等の心をなぐさめ目をよるこばすには缺くべからざるものでありますけれども、これはたゞ目の前に見えたる効用でありまして、森林はまたこの他に人の氣の付かぬ効用が多くあります。其一は水源を養ひて、旱魃^{チカ}を防ぐの用をなすこととであります、森林は大抵土地が高く樹木が茂つて、日光をさへぎってをるから、自然に空氣が冷やかである、故に森林には、雲多く雨多く、水の源をつくるのであります。其二は洪水の害を防ぐの利があります、これ

は森林に降りたる雨水は、木の葉や根にさゝへられて、一時に平地に流れ出でないからである。昔より山林をみだりに伐りたるが爲めに、洪水の害を招きたる實例も少くありませぬ。故に洪水の害を防がんには、河川を修め、堤防を築くのも、固より必要なれども、其源にさかのぼりて、森林を保護するのが第一に必要である。と考へます。この他に森林は土地の氣候を和らげたり又は岩石をくだきて土壤に變ずるの効用があります。古語に一年の計は、穀を種うるに在り、十年の計は、樹を植うるに在り」といふことがあるが、森林を保護するのは、ただ十年や二十年の計ではない、國家百年の長計であり

ます。このよゝに森林は國家の大なる富源でありますから、その保護を充分にして、みだりに伐つてはなりません。

第十五課 山元莊兵衛

鹿兒島の藩士に山元莊兵衛といふ者ありき。性草木を好み山林培養の業に長ぜり。嘗て藩の樟腦製造方の小頭となり、以爲らく古來樟腦を採るに、唯樟樹を伐るのみにして、更に培養することなし。かくては年を逐ひて、此樹の減少せんこと必せり。いかにもして栽培の業を起さんと思ひしが、偶藩より樟樹其他の植付掛を命ぜられたり。時に天保十五年なりき。莊兵衛大に喜びて、此

業に従ひ、數失敗せしかども、志終に屈せず、必ず其効を奏せんことを期せり、後遂に樟樹實植法を發明し、其苗を栽培して、之を各地に植ゑたるもの、其數幾何なるを知らず、然れども樹木の成長は、幾十年の後ならては、其効見えぬが故に、淺慮の輩は、其迂遠なるを笑ひしかども、莊兵衛少しも意とせず、益奮勵して之を勉めぬ。

嘉永年中、藩主日向國某地の山林を伐り、其利を以て林木栽培の資とせんとし、莊兵衛に此事を委ねたり。莊兵衛喜びて承り、男藤助を伴ひて、能くその事を成し、かば、藩主大に其功勞を賞せり。莊兵衛歿して藤助其後を繼ぎ、林木培養に力を盡し、かば、處々の禿山荒野も、い

つしか變じて鬱蒼たる山林と化しぬ。

第十六課 石炭

石炭は、黒色のつやある礦物にして、其元は、太古の草木の土中にうづもれて變化したるものなり。その木炭と異なる所は、唯年久しくして、自然に出來たると、急に人が焼きたるとにあり。故に之を火中に投ずればもゆ、その火力木炭にくらぶれば、頗る烈しきを以て、汽車、汽船及び其他各種の蒸氣機關に用ふる燃料は、皆この石炭を用ふ、其他礦物をとかし、又煉瓦硝子の類を作り、瓦斯を製して燈火となし、すといふに用ひて室内を温むる等、皆此物を用ひざるはなし。我國にて石炭を多く産す

るは九州及び北海道なりとす。國の富強と貧弱とは、石炭を使用する高の多きと少きとを見て知るべしとかや。此の石炭の産出多きは、我國の爲めに、最も喜ぶべき事なりといふべし。

第十七課 汽車汽船

汽車は陸を走り、汽船は海を駛る、共に早きこと飛鳥の如し、此の發明の出で來りしより、萬里を隔つる遠國も隣家の如く、時日を違へずして到ることを得べく、重き物の運送も、亦益々自在となれり。今一例を示さん、昔は東京より京都へ行くに、其道程百三十餘里にして、通常の旅にては、十日前後を費したりしが、今は東海道の

汽車に乗る時は、僅に一晝夜を過ぎずして行くことを得べし。

汽船も、汽車に次ぎて早きものなり、我横濱より亞米利加のさんふらんしすこに至るまで、海上四千五百海里を、太平洋通の汽船に乗れば、僅に二週間前後に到着すべし。此を古の帆前船にて航海せば、幾十日を費すべきか、恐らくはこの數倍を費せしならん。故に世の中の開けて、往來の便利を得るに隨ひ、世界の廣さは、次第に減ずといへる諺の、偽ならぬことを知るべし。汽船の構造は、入り組みたれども、蒸氣の力を機械に通はして、車の輪を廻はし、舵によりて進むるに外ならず

汽車の機械を動かす理も、汽船と同じくして、一の機關車、數多の列車を引き、鐵道の上を走るものなり。此の蒸氣の力を、機械に施して、實地の効用をなさしめたる發明者は、英國人のわっとなり。

第十八課 郵便電信

遠方の人に思ふ事を通ずる方法は種々あれども最も費用少くして便利なるは、郵便なるべし。我國にて郵便のはじまりは、明治四年にして、其後年をおひて、著しく進歩し、今は如何なる僻地にても、郵便の達せざる所なし。郵便には五種あり。通常の書信は、第一種郵便物にして、目方四匁毎に參錢の切手を貼用すれば、内國にては

は遠近を問はず、何れにても到達せざることなく、若し又他見をはゝからざる手輕き用向には、葉書を用ふべく、更に先方の返事を求めたき時には、往復葉書を用ふべし。葉書は第二種郵便物にして、通常葉書は、一枚壹錢五厘、往復葉書及び封緘葉書は、一枚參錢なり。葉書は又一定の規則によりて、私製することを得べし。新聞雜誌の如き一ヶ月に一回以上定期に發刊するものは、第三種郵便物に屬し、目方貳拾匁毎に五厘若しくは壹錢の切手を貼用すべく、書物、帳簿、寫眞及び商品の見本等は、第四種郵便物に屬し、目方參拾匁毎に貳錢、農産物の種子は第五種郵便物にして、目方參拾匁毎に壹錢とす。

小包郵便は、明治貳拾五年にはじまりたるものにして、普通の郵便にて送らんには、目方少しく過大なるときは、此方法によりて送達するをよしとす、目方は一貫五百匁を限りとす。

又急用を達するには、電信に若くはなし、電信は電氣の作用によりて、音信を通ずるものにして、その傳達は非常に速なり。我國にては、明治貳年に東京と横濱間との間にかけたるを始めとし、其後次第に各地に設け、今は全國の都會名邑概ね電信局を具へざるなきに至りぬ。電信料は、一字より十五字(差出人の宿所、氏名とも)までを貳拾錢とし、是より五字を増す毎に、五錢づつを増す

定なり。電信の文言は、總べて片假名にて認め、宿所、氏名も、亦片假名にて認むべきなり。

第十九課 誠の學問

智識を開き、道理を辨ふるには、或は人の言を聞き、或は自ら工夫をめぐらし、或は書物をも讀まざるべからず、故に學問には、文字を知ること必要なれども、世の人の思ふが如く、唯文字を讀むのみを以て、學問とするは、大なる心得違ひなり。文字は、學問をする爲めの道具にて、たとへば家を建つるに、槌、鋸の入用なるが如し。槌、鋸は、普請に缺くべからざる道具なれども、此の道具の名を知るのみにて、家を建つることを知らざるものは、之を

大工といふべからず。これとひとしく文字を讀むことのみを知りて、他を知らざるものは、之を學者と謂ふべからず。謂はゆる論語讀みの論語知らずとは、則ち是なり。

我が國の古事記は、誦誦すれども、今日の米の相場も知らざるものは、之を世帯の學問に暗き人と云ふべし。經書史類の奥義には達すれども、商賣の法を心得て取引を爲すこと能はざるものは、之を帳合の學問に拙き人と云ふべし。數年の辛苦を嘗め、數千の資金を費して、洋學は成業すれども、猶一個獨立の活計を爲し得ざるものは、時勢の學問に疎き人なり。是等の人物は、唯是字を

讀むと云ふに止り、其功能は、俗に云ふ飯を喰ふ字引にして、國の爲めには、寧ろ無用の長物と云ふべきなり。さては世帯も學問なり、帳合も學問なり、時勢を察するも、亦學問なり。何ぞ必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問と云ふ理あらん。

(福澤諭吉 學問のすゝめ)

第二十課 職業に貴賤なし

人の職業は、其種類の何たるを問はず、皆國を富まし、世を益するものなれば、其業に貴賤の別あることなし。故に農夫の業も、工人、商人の務も、又官吏學者等の職も、皆同様に貴ぶべきものなり。官吏學者の職は貴くして、實

業家の業は賤しといふが如きは、大なる誤なり。

勤勞は、誠に貴重なるものにして、西洋の諺に、汝が額に汗して食へといひ、又我國の諺にも、かせぐに追ひつく貧乏なし、といふことあり、此等の語の意味は、自ら勞働して生活し、他人の勞力に、依頼すべからずといふことなり。

諸子も知れるが如く、昔 雄略天皇の皇后は、躬ら宮中に於て、養蠶の業を營ませ給ひ、又外國にては、獨逸の皇太子は、必ず一の職業を持たせ給ひ、皇帝の机、椅子等を自ら作らせ給ひしことありとぞ。

されば、職業は、人を貴からしむるものにして、職業の内
に、貴賤の別はなきなり、唯最も賤しむべきは、職業のなき人なり、人力車夫の勞力も、之を無爲徒食の貴公子に比ぶれば、大に優れる所あり。治

正誤表

頁	行數	誤	正
十二頁	九行目	箸をあげ箸	箸をあげ箸
十八頁	四行目	飯碗	飯碗
卅八頁	三行目	汗して食へ、といふ汗して食へといひ	

明治三十五年十月二十一日印刷
明治三十五年十月廿八日發行

價	定
四卷	壹拾三錢
參卷	拾五錢
貳卷	拾六錢
壹卷	拾六錢

國民教科研究會編纂

發行者 安原正光
東京市京橋區桶町貳拾壹番地

印刷者 大倉廣三郎
東京市京橋區桶町貳拾壹番地

印刷所 小川印刷所
東京市神田區錦町三丁目壹番地



發行所

東京市京橋區桶町貳拾壹番地
大津市菱屋町三十一番屋敷
東京市京橋區桶町貳拾壹番地
淡海堂書店
大倉廣文堂

從三位勳四等前田正名君題辭 國民教科研究會編纂

家庭實業讀本

第一卷 定價拾三錢
第二卷 定價拾五錢
第三、四、各、拾、六、錢

現時我國教育社會の輿論が如何に實業思想養成の必要を唱導し當局者も亦切りに之れが普及策を講じつつあるかは世の教育家諸君の等しく認めらるゝ所なるべし然るに悲しむべしこれが好良の讀本に至つては皆無と謂ひて可なり僅に其一、二あるも或は程度高きに失し或は思想餘りに高尚に失し義務教育を卒へたるものをして讀ましむべき程度のものに至つては實に絶無といふべし
本書は義務教育を卒へたる者に我國の位置地勢物産の如何、農工商及び水産業の發達、模範とすべき實業家の傳、併に世界に於ける我國の位置を知らしめ兼て實業を重んじ自營獨立の思想を養成せん爲めに編纂せるもの
行文元より平易にして解し易く、材料は勉めて兒童の經驗界に求めたることにて不知不識の間兒童をして實業上の興味を起し自ら奮勵するに至るべし
兒童夜學用讀本としては勿論家庭に於ける讀み物として最も適當なる書なり

藤樹先生一代の圖

縱三尺五寸 一枚 十錢 全 軸製五拾錢

此圖は先生が幼年の時父母に仕へしより一代の經歷を前後貳拾餘種の畫にて一紙面に纏めたるものにして修身教授用及兒童賞品用に供するを主なる目的とし編製したるものなり

歷史 教授用 年代直觀掛圖

近刊

教訓畫帖

第壹編 花咲翁

近刊

3
4

041868-000-5

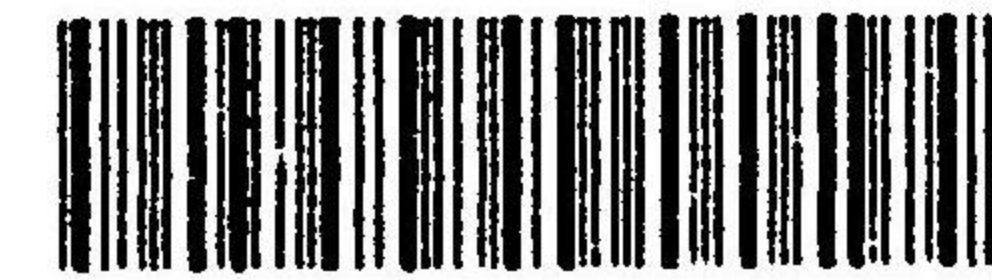
特23-174

実業読本

国民教科研究会/編

M35

BDI-0504



4